

寒さが厳しくなり、最低気温が氷点下になることもあるこの頃です。子どもたちが元気なのは嬉しいのですが、その服装を見ているとこれで大丈夫なのかと心配になる子もいます。先日ワイシャツ姿の子どもに声をかけてみました。「寒くないのですか?」「ヒートテックの下着を着ているので大丈夫です」のやりとりがありましたが、彼はネックウォーマーを身につけていました。子どもは自分の身体が冷えていくことにいつ気がつくのでしょうか。冷え始めたとき? すっかり冷えてから? それとも気づかない? できれば保護者の一言がほしいです。「寒いからセーター着ていきなさい」「手袋すると温かいよ」など、朝子どもたちへの声かけをお願いします。

## 【車での送迎について思うこと】

先日発行した学年だよりに、朝何らかの事情があって車で学校に子どもを送ってきたときは、必ず小学校の駐車場で子どもを降ろし、子どもが道路を横断するときの安全確保までしっかりと行ってくださいというお願いをしました。その後、子どもが降車して横断するまでの間、しっかりと見守ってくださる方が増えました。ありがたいことです。小学校だけでなく中高でも子どもを車で送ってくる方はいます。学校としては、そうしなければならない事情もあるということは理解しているつもりです。お互いのそういう理解の中で行われていることであるからこそ、近隣の住民の方や車で通行する方の迷惑にならないようにしてもらわなければならないのです。そういうことをきちんと理解していただけることが第三者から見たときに学校と保護者の関係がうまくいっている学校と思ってもらえますし、学校と保護者の間の信頼関係も作れます。

さて、車で子どもを送り迎えすることについては、実はいろいろな問題があると思います。最寄りの駅までの交通手段が限られているような場合はもちろんそうしていただかなければならないのでしょうか。しかし、学校までの送迎（特に朝の送り）が日常となっているような場合は、果たしてそれは子どもためになっているでしょうか。子どもはそれを本当に望み・喜んでいるでしょうか。子どもを車で学校まで送ることになるまでの時間の経過を前の晩の生活から辿っていくとどうでしょう。夕食の時間、その後の過ごし方、お風呂や就寝の時間、朝の起床から朝食さらには身支度の時間、そしていざ学校へ。この流れがどこかで止まってしまったり、変わってしまったりすることで、最終的には保護者が車で送るようになってしまうようなことはないでしょうか。もちろん、その過程で子どもの機嫌は悪くなるかもしれません。中には「学校に行かない!」などと言う子もいるかもしれません。これはある意味親を脅す文句ともなり得ます。保護者の皆さんの中には、まさか子どものご機嫌を取りながら支度をさせる人はいないと思いますが、いかがでしょうか。子どもが自分の学校に自分の足で通うのは当たり前です。親の仕事は自分を車で送ること。子どもがこう思うようになってはいけません。

朝元気に「行ってきます」と言って玄関を出ていく。そんな子どもたちの姿を思い浮かべます。そこには子どもの笑顔だけでなく、見送る親の笑顔もあります。

## 【作品展】

小学校の作品展はどの行事よりも静かで落ち着いていて、時間がゆったりと流れるような一日です。そういう時間の流れの中で、見学に来てくださった保護者の皆さんの表情はとても穏やかに見えました。自分の作品を見てほしくていっしょけんめいに案内する子どもたち。作品を見てもらったあとで、「上手だね」「とってもいいね」「がんばったね」と声をかけてもらって嬉しそうにする子どもたちがたくさんいました。親子で見ってもらう作品展の意味はここにあります。自分の作品をほめてもらい、その作品を仕上げるまでの様子を聞いてもらえた子どもたちは幸せです。学校での子どもたちの活動に関心があり、子どもたちの様子を知りたい、子どもたちを応援したいという気持ちの強い保護者の皆さんが多いからこそ成り立つ行事です。

今回、私が特に昨年と違うと感じたのは、4～6年生の毛筆の作品でした。昨年は掲示された作品を見て、「なんとかしたい」「なんとかしなければ」という気持ちを強く持ちました。作品を見ていた保護者からも、ちょっと上手な子の字を見ては「この子は外で習っているのね」という声が聞こえてきました。それは、「学校だけでは上手な字が書けるようにはならない」という声になって私の耳には入ってきたのでした。子どもたちにしっかりと活動できる場を提供できていないことと、きちんとした成果を出せないでいたことをとても残念に思いました。そのことがあってから先生方と相談し考えたのが、クラスを半分に分けて行う書写の授業の形態でした。毛筆のグループと硬筆と作文のグループに分かれての活動です。毛筆の授業では、先生から直接声をかけられることが多くなり、そのような環境で自分が書いた字と向き合うことができたようでした。昨年度と比べると活動の時間は10回から7回に減っていますが、内容的には充実していると考えています。

このようなことから分かることは、子どもたちにはがんばろう・がんばりたいという気持ちがあるということ、子どもたちががんばれる環境を用意してあげるのが私たちの大切な役目であるということです。そして、私たちは教えすぎたり、指示しすぎたりすることなく、できるだけ子どもが自分で学習や様々な活動に取り組み、その成果を自分のものとして確認しながら一歩ずつ前に進んで行けるようにしなければなりません。